



石原慎太郎
開高健
集

現代日本の文学

48

9108

現代日本の文学

石原慎太郎 集
開高 健

伊藤 整
井上 靖
川端 康成
三島由紀夫
〈編集委員〉
足立 卷一
奥野 健男
尾崎 秀樹
北 杜夫
(五十音順)

学習研究社

現代日本の文学

48

石原慎太郎 集
開高 健

全50巻

分割払価格 39,000円

現金価格 35,500円

昭和45年10月1日 初版発行
昭和48年2月1日 十版発行

著者 石原慎太郎
開高

発行者 古岡秀

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4-1
郵便番号 145 振替東京 29
電話 東京(720)1111 (大)

印刷 大日本印刷株式会社

中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙クロス 東洋クロス株式会社

製函 日本紙パルプ商事株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)
「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学
電話は、東京(03)720-1111 内線352,353か、東京
727-1600へお願いします。

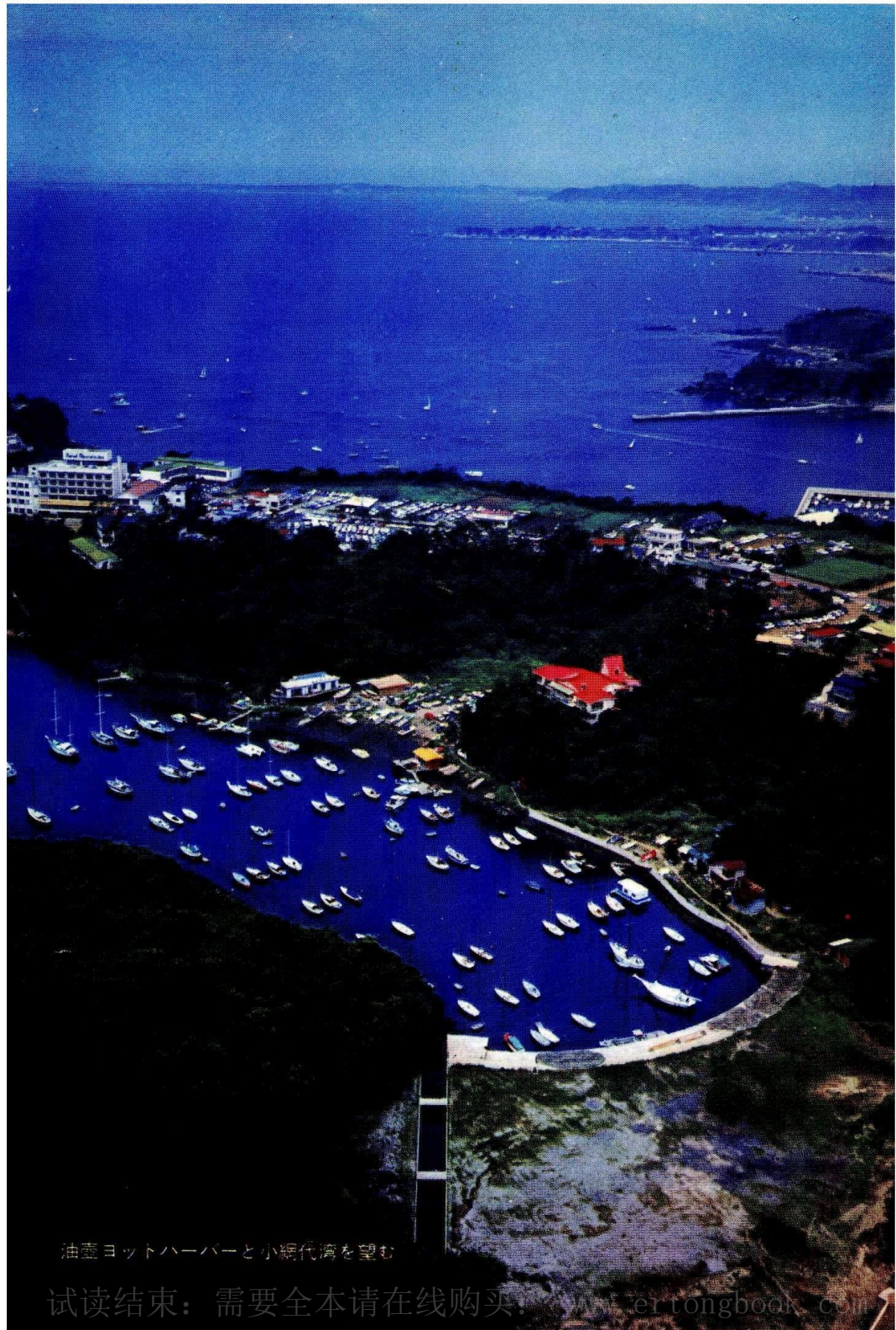
石原慎太郎文学紀行

神奈川県 葉山沖



二つのヨットは全く同じ
間隔ですべって行く。唄
を止め耳を澄ますと、霧
の流れる音が聞えるよう
だった。その流れの中に、
前の船の帆が白く浮んで
は又消えて行った。

（「太陽の季節」）



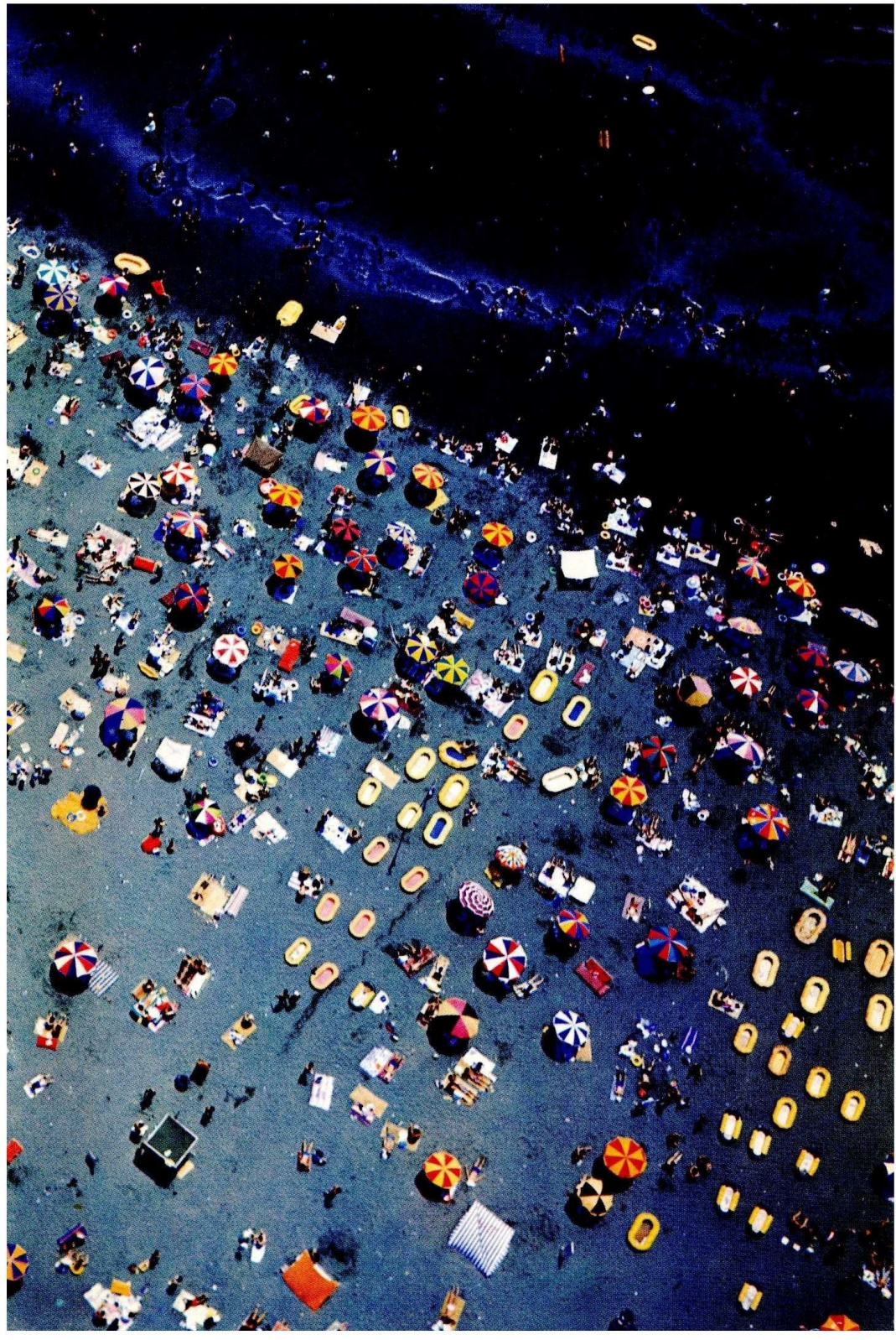
油壺ヨットハーバーと小網代湾を望む

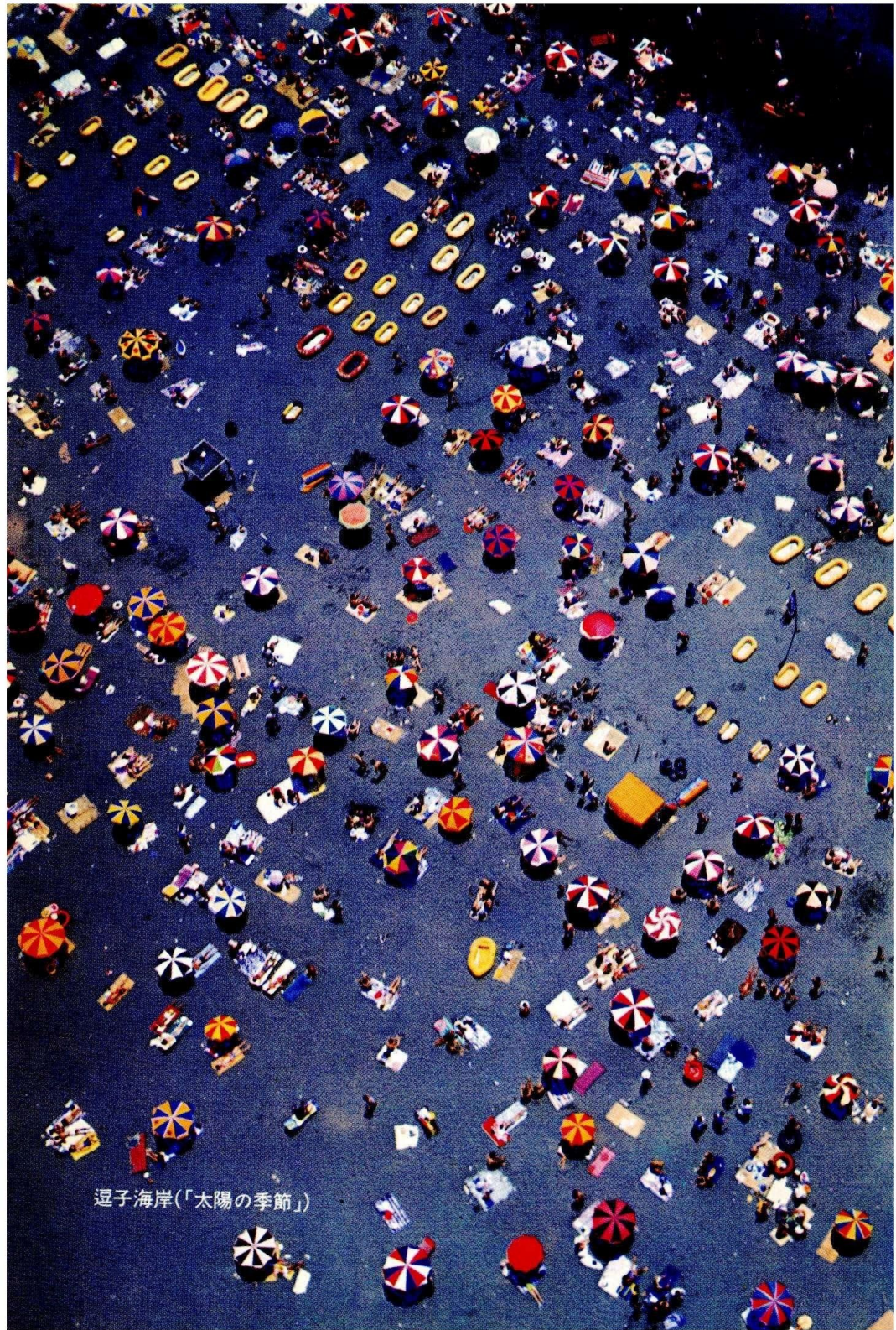


油壺を廻り、他に三つ四つ小さな岬を過ぎれば間もなく三崎のはずである。（「海の地図」）

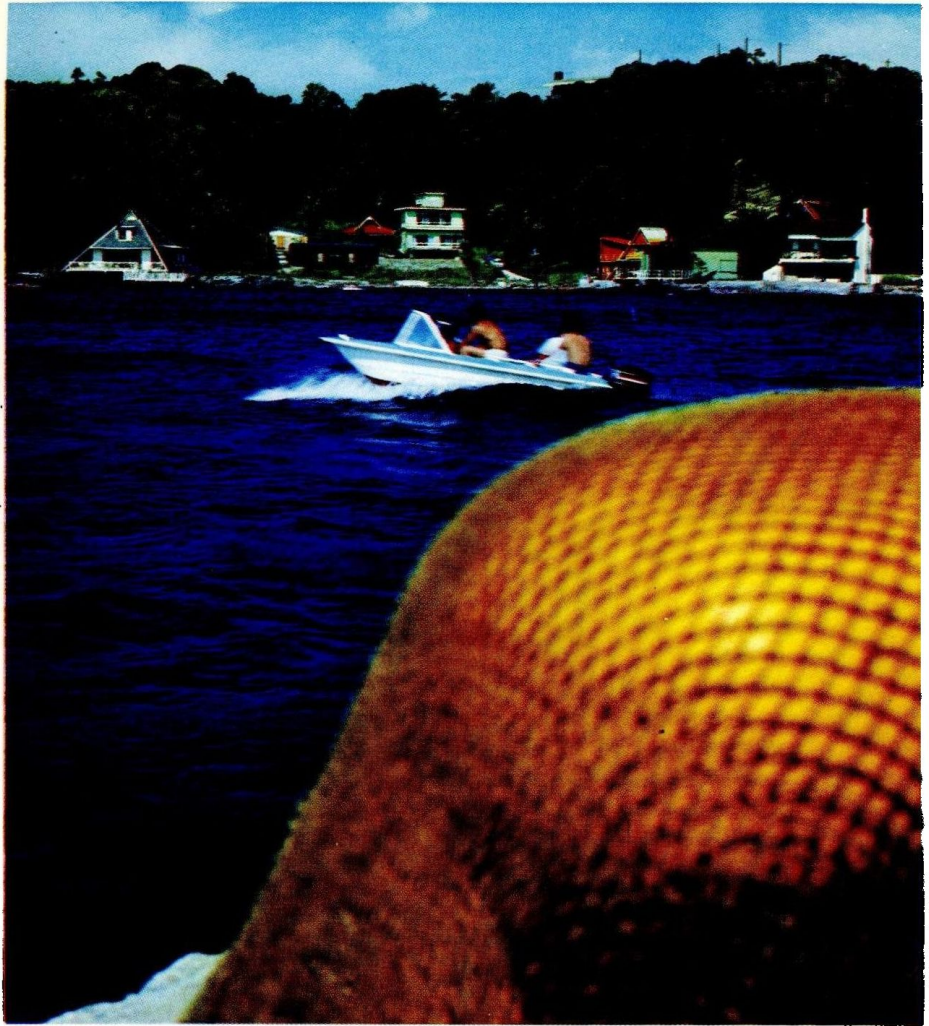
港の周りで、土地の高校のヨット部員たちが練習している。陸で吹くホイッスルで固って走る七、八隻の小さいヨットが、一斉に反転しては又走り出す。浮標を廻る時、一団に固って又四散するヨットは獲物の周りに群がっては飛び立つ水鳥か蝶のようにみえた。

（「海の地図」）





逗子海岸(「太陽の季節」)



入り江を行き来する小船は、夏間はヨットやけたたましいモーターボートにまぎれて目立たなかつた、入り込んだ入り江の奥にある小さな漁村の漁船である。

(「海の地図」)

神奈川県 小網代の入り江

確かに、風に満ちて一杯に拡がったスピンの量感、それを上げ支えているマストやシート、いや船自身の力の限界を超えたもののようにさえ感じられた。

相模湾をスピンを張って疾走するクルーザー
(「星と舵」)





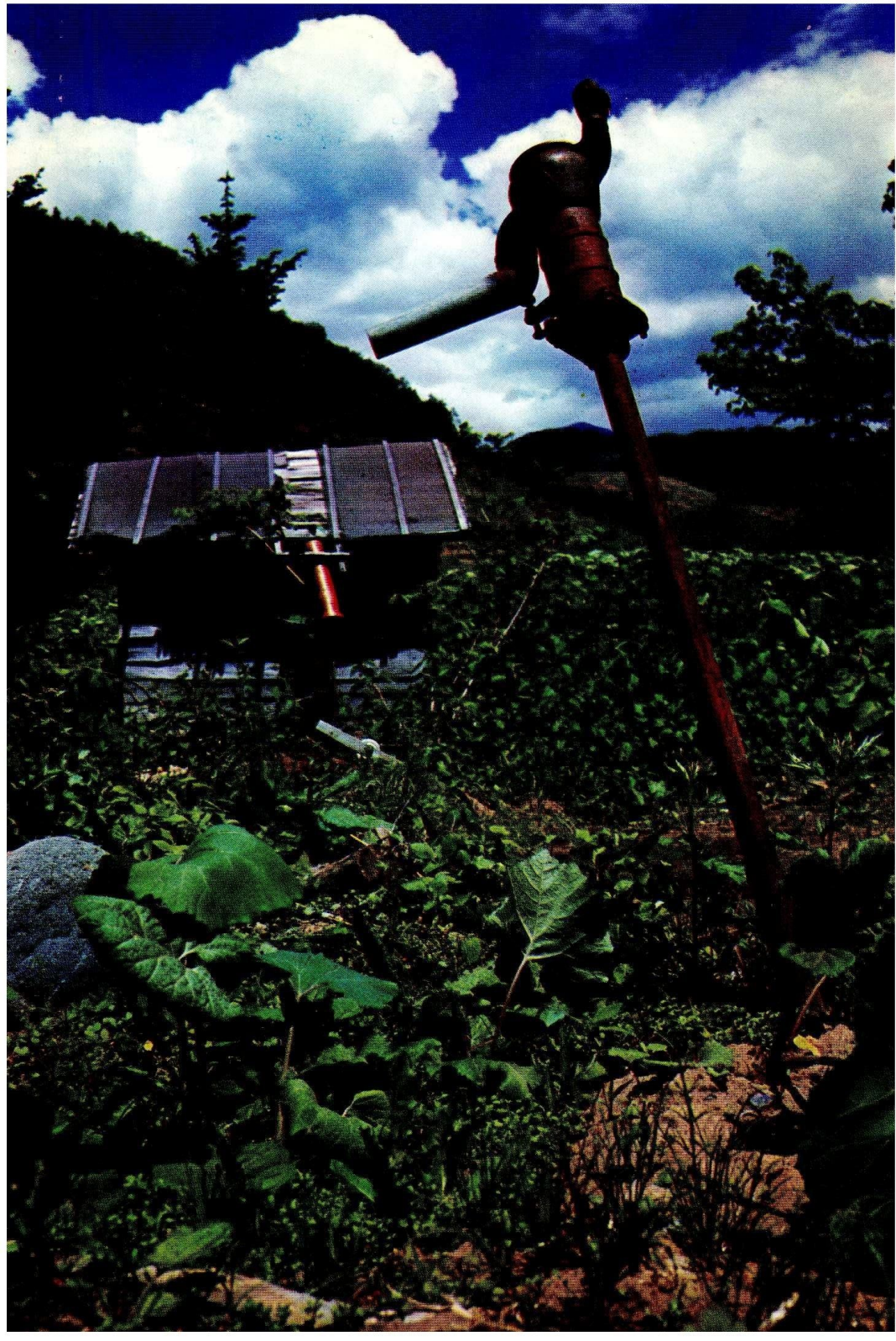
気合いを見計らって少年はロープを一氣にたぐった。快
い手応えに、白い帆の固りがするすると釣り上げられ、
上りきる間もなく風を吸った帆は忽ち糸を切ってパラシ
ュートのように一杯に開いた。一瞬、掌に握ったロープ
が少年を引き倒すように緊張する。ヨットは目に見えて
速度をました。 (「ヨットと少年」)

開高健文学紀行

北海道上川郡にある開拓部落



時間の輪はほどけて霧となり、果てしないガスのかたに散ってしまう。人影はない。獣も走らない。雪。雪があるばかりです。雪と風があるばかりです。ここは独房です。広大無辺な、ドアも錠もない、独房です。
(「ロビンソンの末裔」)





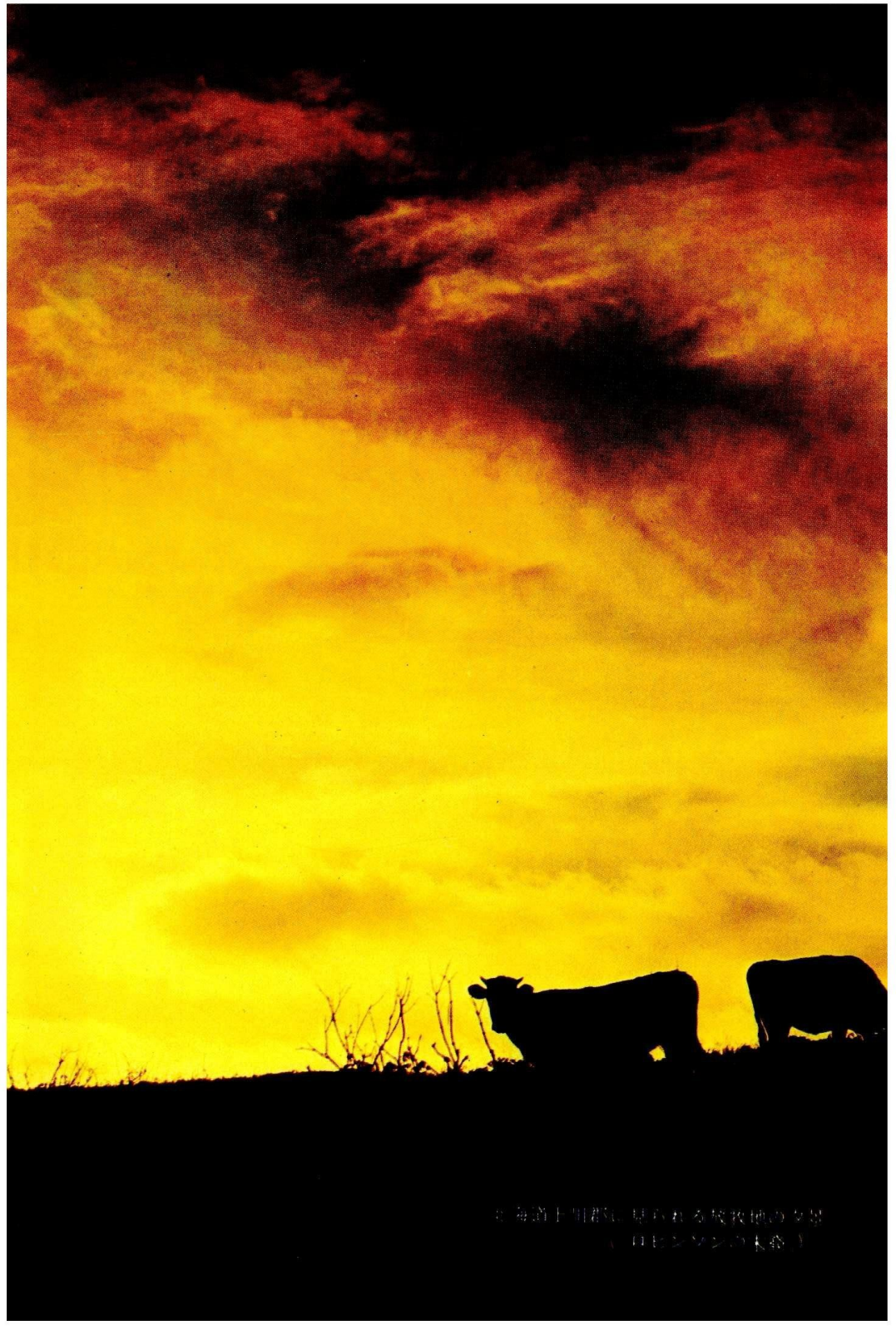
……なるほど言葉のとおりに、あわれな掘立小屋があちらこちらに難破船のようにチラホラ土にしがみついているのが見えるばかりでした。

〔ロビンソンの末裔〕

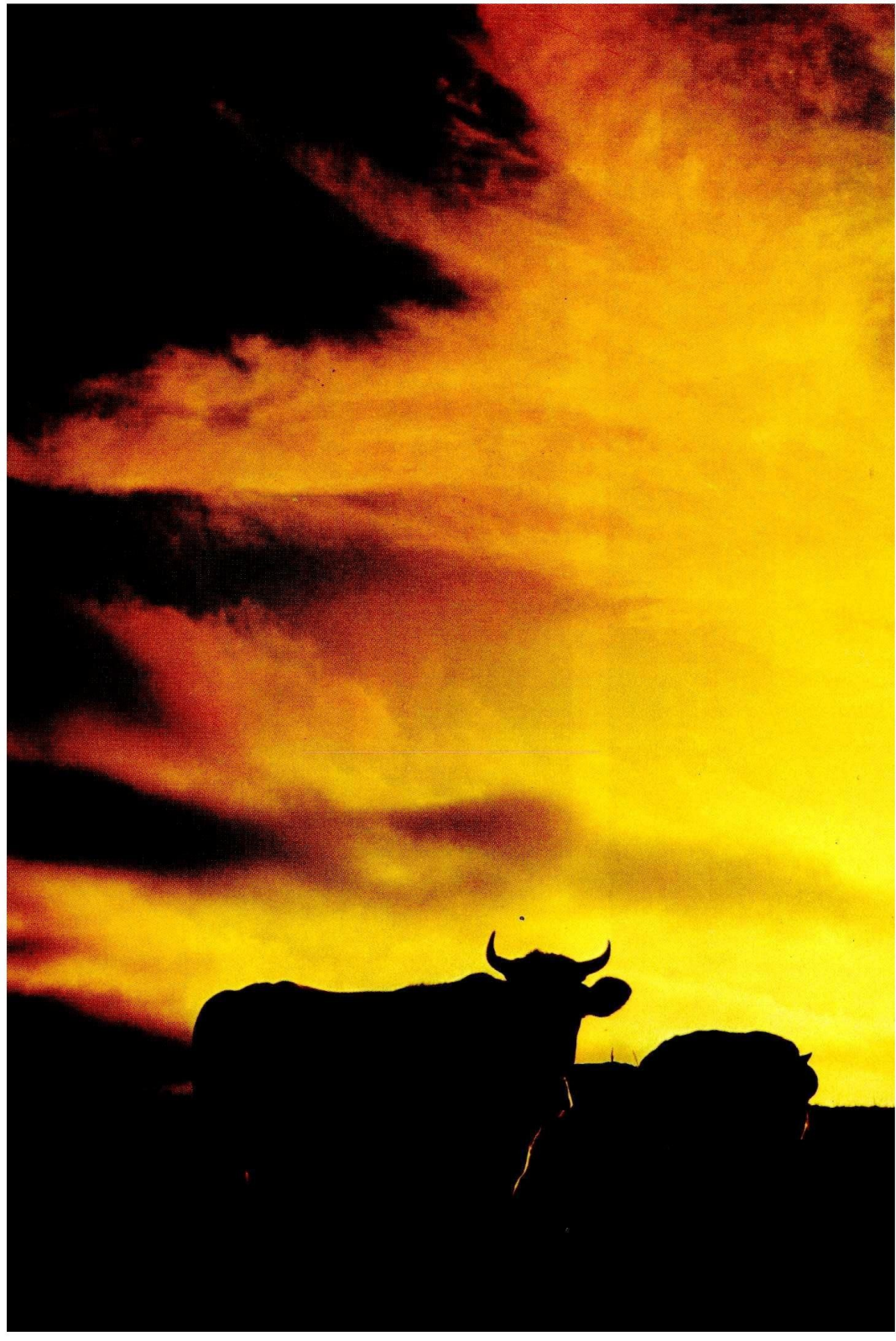
北海道上川郡にある開拓部落の廃墟

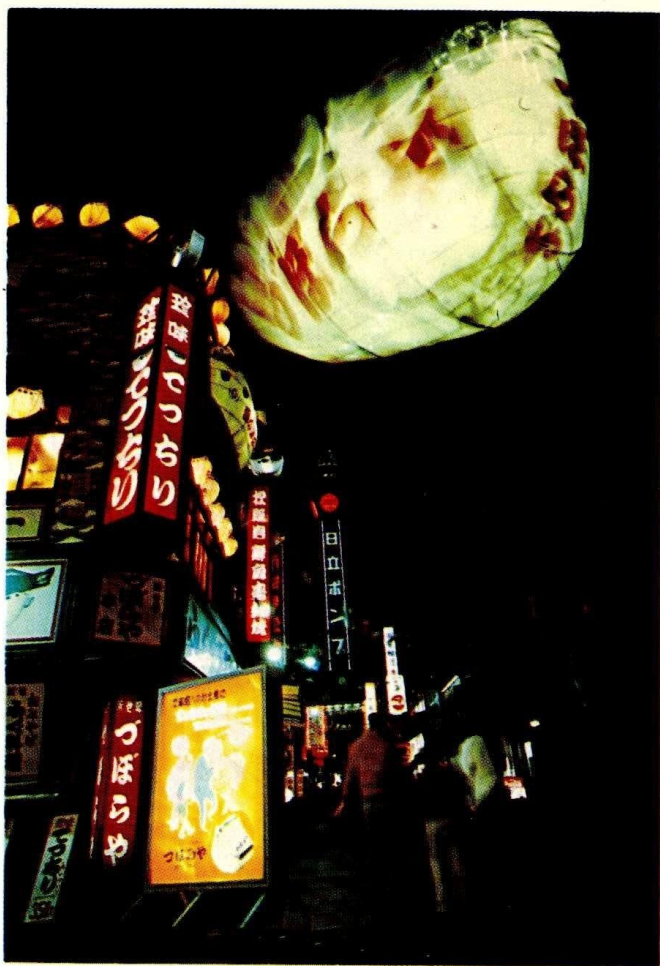
もう一つ、やっぱりそうやって毒を流しただけでは土はやせたままだからよそから土を運んできて栄養補給をする。つまり、「客土」をする。これをしなければここのごろた石畑はどうにもならんケレ、ということでした。

〔「ロビンソンの末裔」〕



北海道十勝郡に見られる放牧地の夕景
（ロビンソン氏の撮影）





ジャンジャン横町というのは大阪の「新世界」という場末の歓楽街にあるせまい路地である。

（「日本三文オペラ」）

大阪 「新世界」の繁華街

川は、よくわからないが、運河らしく、水はよどんだままうごかず、おそろしい腐臭があたりにたちこめて、生温くするどく鼻におそいかかった。

（「日本三文オペラ」）

大阪 猫間川と大阪城